石垣会　日曜聖書講筵（小諸）

契約

――エレミヤ記第31章31～34節――

１９７４年８月４日
小池辰雄

アブラハムとの契約　無条件に身を献げる　神殿・律法・祭司宗教　御霊に被われ貫かれ浸透される　栄西の「大いなるかな心」　御霊の共同体　自由の律法・自由の霊　宇宙的なキリストの霊と一つになる　最後の新天新地の神の民の一員に　永遠の契約の血　罪からの自由・愛への自由　人間の実存的七相　祈り

【エレミヤ31】

31主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る。32この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であったのだが、彼らはそのわたしの契約を破ったと主は言われる。33しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。

●アブラハムとの契約

「契約」のお話をします。「旧約」・「新約」という約束、これは契約で、「旧き契約」・「新しき契約」です。聖書は契約の本なんです。「契約」という字は、ヘブライ語の「ベリート」という字で、ギリシア語では「ディアテーケ」という。「縛る」「バルー」というアーカッド語があるけれども、「縛る」という意味です。「ベリート」というヘブライ語の元は「ベルトゥー」「足がせ」という字からきているだろうという。とにかく、「相手を縛る」という、だいぶぶっそうな言葉です。旧約聖書に285回出ているそうです。要するに、「心を縛る」わけだね。だから、「誓い」という事柄と表裏してくるわけです。

人と人との間の契約のことはいろいろありますけれども、そういったことは今日は全部、省略しまして、神と人との間の契約を取り上げます。ドイツ語では「ブント」（Bund 契約）といいます。だから、イスラエルの民のことを「ブンデスフォルク」（Bundesvolk）「契約の民」という。ユダヤ人は神さまと契約を結んで、神と民との関係が出来上がったので、何か自然的な関係ではない。その「契約」を――あるいはある時は「約束」という言葉で言われ

ますが――それでは少しく歴史的に行きましょう。

創世記第12章から。契約の前に神さまはアブラハムを上から呼ばれた。アブラハムの方から尋ねたのではなくて、神さまの方からです。

「1**時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。2わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。」（創世記12・1～2）**

口語訳聖書は、神さまが人を呼ぶとき、「あなた」と訳してあるが、どうも日本語の「あなた」というのは、私はくすぐったくてしょうがないんですが、「お前」くらいで結構だろうと思う。あるいは口語訳でも「なんじ」と言ってもいい。私は明治の人間で困るですね。

「祝福の基（もとい）となるであろう」

と、またこれが「基となるであろう」ときてますが、「基となる」ということ。

神さまは、日本語で「であろう、多分そうなるであろう」なんて、そんな契約の仕方をしない。「なるぞ」というのを、ただ未来のことだから、未来の言葉として、「であろう」なんていう訳し方をするけれども、ヘブライ語の未完了というものは、それは今事実、完了しないけれども、しかしはっきりとくるということも全部、この未完了で言うものですから、この未完了形であると全部「であろう」と訳すから、気の抜けたことになる。何も私は口語訳にケチをつけるわけではないけれども。こないだも、あそこの大集会〔原始福音の集会〕で言ったんだよな、そのことを。どうぞ、皆さんは、御霊に導かれて、ヘブライ語を知らなくたっていいから、新しい訳をつくってくださいよね。

「神さまの心はこういうところにあるんだ」

というようなわけで、あまり字にこだわらないように。そういうように、

「アブラハムが万民の祝福の基となる」

という「約束」から始まっているわけです。それがもう少しはっきり、創世記15章にいきますと――いちいち読むと時間がかかりますから止めますけれども――有名なところは、

「5**そして主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい」。また彼に言われた、「あなたの子孫はあのようになるでしょう」。6アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。」（創世記15・5～6）**

「主はこれを彼の義とした」

という。聖書の中で一番大事な句の一つです、この15章6節というのは。とうてい信じられないことを受けとることがこの「信」ですから。常識判断を乗り越えるところの、超理性の世界です。

「神さまが言われたことだから、もうこっちの理屈は抜きだ」

と、「はい」と言いました。神はこれを「よし」と仰った。「よし」（義）と認められた。「よろしい」というのが「義となし給う」ということです。

「7**また主は彼に言われた、「わたしはこの地をあなたに与えて、これを継がせようと、あなたをカルデヤのウルから導き出した主です」。……17やがて日は入り、暗やみになった時、煙の立つかまど、炎の出るたいまつが、裂いたものの間を通り過ぎた。」（創世記15・7～17）**

即ち契約は、

「動物を裂いて、その中を通り過ぎる」

ということが契約に対する誓いの行為であった。

●無条件に身を献げる

それから17章に行きますと、今度は契約の徴として「割礼」のことが出てきます。これは読みませんけれども。

「契約」はどういうことかというと、何か条件でもってお互いに「こうしたらこうだ」というような契約でなくて、無条件契約です。神さまの一方的な恩恵の約束がこの契約になっている。そして、17章19節、

「19**神は言われた、「いや、あなたの妻サラはあなたに男の子を産むでしょう。名をイサクと名づけなさい。わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約としよう。」（創世記17・19）**

ここに「永遠の契約」とある。ところが、その永遠の契約の土台となるところの、

「イサクを献げろ」

と、22章に出てきて、まるで契約を破るような行為を神さまはなさる。ということは、

「いかにアブラハムが神の言葉を本当に信ずるか」

ということの非常な試みであった。さきほど無条件と言いましたが、神さまの方で無条件で恩恵の契約を与えるところに対しては、こちらがまた無条件にこれを受けとる。ということはどういうことかというと、「無条件に身を献げる」ということなんです。恵みに対しては、こちらが無条件に身を献げる。アブラハムの子イサク、約束の対象のイサクを献げるということは、同時にアブラハム自身を献げるということなんです。ある意味においては、自分を献げるよりか辛い面がある。その自己献供、献げということは、ただ人身御供（ひとみごくう）とか何とか、そういうような比較宗教学的に考えるべきものではない。

「無条件に自分を献げる」

ということに、神さまは本当に、

「アブラハムが契約をしっかりと受けとった」

ということを見られたわけです。契約に対する信とは何かというと、「己を献げる」ことが

信なんです。「信ずる」即ち、

「神に然り（しか）と言い、己に否（いな）と言う」

ことは「己を棄てる」ことですから。己を棄てることは、「神さまに己を献げる」ことです。そういった「否」というのは、今度はもの凄い積極的な内容を持っている。

即ち、「然り」と「否」はその点では一つなんです。神に「然り」と言うことと、己に「否」と言うことが一つです。これが本当に信の世界。即ち「信ずる」とは己を提供すること。これくらい強い魂の在り方は他にないわけです。だから、

「信仰は棄身の行為だ」

と申し上げた。信ずるとは本当に棄身の行為なんです。

「行為によって義とされる」

ということも、

「信仰によって義とされる」

ことも実は、パウロとヤコブは一つなんです。そこをルッターは見損なった。

そういうわけで、先ずこのアブラハムからそうやって始まった。それからまだ創世記にありますから、この創世記のちょっと前の方へ戻らなくてはいかん。9章12節、

12 さらに神は言われた、「これはわたしと、あなたがた及びあなたがたと共にいるすべての生き物との間に代々かぎりなく、わたしが立てる契約のしるしである。13 すなわち、わたしは雲の中に、虹を置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。」（創世記9・12～13）

と。即ち、義人ノアは神さまに対する信仰を貫いていたから、それで審判に合わず、皆にバカにされながら方舟（はこぶね）を造って、そして大事な動物がみなそれに一緒に入って救われた。そこで、再びそういういったことはしない。この地に幸いをもたらすと。その契約の徴として「虹」を与えた。天地を橋渡しするようなものが虹ですが、審判のあとの恵みのすがた、涙のあとの光のすがた、これが即ち虹です。虹がそういった「契約の徴」としてある。

虹についてはまだ言うこともありますけれども、省略いたします。

今のノアの9章8～17節あたり、それから、まだヤコブの場合、ヨセフの場合がある。

●神殿・律法・祭司宗教

それから特にヨシュア記の24章。ヨシュアはモーセのバトンタッチをした信仰の選び人です。この24章というのは大事なところです。

「1 ヨシュアは、イスラエルのすべての部族をシケムに集め、イスラエルの長老、かしら、さばきびと、つかさたちを召し寄せて、共に神の前に進み出た。2 そしてヨシュアはすべての民に言った、「イスラエルの神、主は、こう仰せられる、」（ヨシュア24・1～2）

といって、ずっと語っていきます。要するに、シケムという所はイスラエルの12部族が――いわゆる「宗教連合」といいますが――この宗教連合を固く結んで、外敵や何かに対してイスラエルの部族が神の民として団結を固めた。宗教的な意味における団結を固めた大事な宣言の所です。そこで、このシケムにおけるところのヨシュアを中心にした12部族の団結において神とイスラエルとの、イスラエルが特にそういった選びの宗教の民としての――「契約」という字はここには出ていなかったと思いますけれども――非常に固めの大事な所であるから申し上げるわけです。15節、

「15**もしあなたがたが主に仕えることを、こころよしとしないのならば、あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、いまあなたがたの住む地のアモリびとの神々でも、あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます**」（ヨシュア24・15）

といって、決断を促している。「これに従うか」といって、みんながこれに応じた。即ち、その「ブント」（契約）の種族の間の契約、主の前における種族の間の結び、契約というものがここに固められた。そういう意味における契約なんです、ここのところは。

それから、イザヤ書に行きまして、エレミヤは歴史的にいうとイザヤのあとですから、イザヤ書59章をみると、

「21**主は言われる、「わたしが彼らと立てる契約はこれである。あなたの上にあるわが霊、あなたの口においたわが言葉は、今から後とこしえに、あなたの口から、あなたの子らの口から、あなたの子らの子の口から離れることはない**」と。」（イザヤ59・21）

イザヤ56章から66章までを特に第三イザヤといいますが、第三イザヤというのは――紀元前515年からが第二神殿が建った神殿宗教、いわゆる狭い意味でのユダヤ教――その祭司宗教に移った時の預言者です。この第三イザヤは、預言者と祭司が本当に渾然としたような人です。その点では、非常に第三イザヤというのは特色があると思う。非常に深い預言者の霊をもちながら、また深い祭司の役割を持っている。これが硬化してしまって、いわゆる律法宗教、いわゆる祭司宗教になってしまったから、ダメになったけれども。

本当は、この預言者面と祭司面は宗教の大事な両面なんです。預言者は神の言葉を人に伝え、祭司は人の願いを神に執り成す方ですから。この二つは実は、偉大な預言者は両方を持っています。それから、本当に偉大な祭司なら両方を持っているわけです。この両面がこの第三イザヤではよく出ている。

そのひとつの大事な契約がこの59章のここのところです。これは案外、学者もあまり取り扱わないけれども、これは非常に注目すべきことだと私は思っている。

「御霊を与えた」

という。そして、「わが言」といい、「わが霊」といっているでしょ。「霊」と「言」が同義

的に使ってある。これは日本語でいうと、
「言霊（ことだま）」
あるいは
「霊言（れいげん）」
「言霊（げんれい）」というところの事態です。聖書は、神の言はこの霊と言は別つことができない世界です。あるときは、もう言葉が絶しまして、最後は霊ですけれども、

「神の国は言（ことば）にあらず、力にあればなり」

とパウロが言ったあのときの「力」は霊のことを言うんです。パウロがいう「力」というのは御霊の力ですから。そういう意味において、ここのところで、
「御霊が口に与えられて、これが裔（すえ）の裔まで続く」
といった契約です。この第三イザヤのこの言葉に注目していただきたい。

●御霊に被われ、貫かれ、浸透される

エレミヤの31章の31節から34節まで、これまた素晴らしいところです。これはよく言われるところです。イザヤは、第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤを通して非常に霊的な、特に霊的な預言者です。エレミヤは心の深い、心の預言者です。今度、私は「ハレルヤ」37号に預言者を貫いてキリストへの道を書きましたから、読んでいただきたい。

〔註：著作集第9巻『感想と紀行』／第一章「告白と論説」／一五、「ガリラヤ湖」（「ハレルヤ」第37号（１９７４年８月））〕

エレミヤは、心のハートの上でやはりキリストに一番近い預言者ではなかったかと思います。ホセア、エレミヤ、イエスというような系列が心の面ではあるように思われる。それだから、やはりこの契約のところでも、特に「心の」という言葉が出てくるわけです。

「31**主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る。32この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であったのだが、彼らはそのわたしの契約を破ったと主は言われる。**

これは、「夫と妻」という、ホセアの言われたところの事態です。

「彼らはそのわたしの契約を破った」
という。即ち、宗教的な他の神々を祀（まつ）ったという宗教的姦淫です。

33**しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、**
「うちに」というのは「心のうちに」ということです。

その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。」（エレミヤ31・31～33）

「心・魂・霊」。よくその心と魂と霊を段階的に考える考え方もあります。それも一理あります。けれども、私はこの頃――全くこの頃なんです――その段階的よりもやはりあるひとつの中心によるところの円に書いた方がなお結構だと思う。即ち、私たちにおいていては心と魂と霊は実はもう分離できない。そして、一番お互いにこうやって交わる世界で一番気楽に――「気楽に」といってはおかしいけれども――通ずる世界はこの「心」なんです。その心をもうひとつ被っている大きなもの、これは霊魂の「魂」といわれる。魂魄なんていう。そしてこれを全部被っているのが「霊」。この霊が神の霊に包まれてしまう。これは御霊、聖霊です。

「心で祈れ、霊で祈れ」

とパウロが言いました。心で祈る世界はみんなに分かる言葉です。霊で祈る世界は異言になる。要するに、心と魂と霊、それに地上においてはこの肉体がもうひとつ被っているといっても、ある意味においていい。まぁ図式というものは割り切れないから困りますけれども。要するに、人間の一番深いところです。

お互いにイデオロギーではダメなんです、観念的な世界では。宗派的なものもダメ。本当にお互いに交わる世界は心の世界です。ただし、この心の世界が本当に心であるためには、この御霊に包まれないと、この心が素晴らしくならないです、この心は生まれつきの心だけでは。御霊に被われ、御霊で貫かれたこの心はまた素晴らしい心になってくる。ただ普通の生まれつきの心よりももっと深い心になってくる。心の深化というようなことも、これは御霊がくると成ってくる。

即ちもう少し言い換えると、まぁ普通、我々は愛というものを正直、誰でも持っていますよ。けれども、この愛が本当に深い愛になるためには、御霊が来なければ深い愛にならないでしょ。御霊というものは、もちろんそれは上からくる別のものだけれども、そいつが私たちの全体を変質変貌させてくる。そうでしょ、御霊がくれば、肉体だってもの凄く活力を得てくるでしょ。

御霊の内側にもう一つ線をもし置くなら――点線でもいいや――これは体でもいい。その一切の全存在が

「御霊でもって被われる」

とか、あるいは

「御霊で貫かれる、御霊に浸透される」

とか――表現は何でもいい――そうなってくると、体も生まれつきの霊も魂も心もみな質的に変わってくる、深化されていく。あるいは、向上していく。この聖霊がいかに全存在を変えていくかということです。

「人新たに生まれずば」

というのは、そういうような、聖霊でもって本当に被いつくされてしまう。あるいは、聖

霊が一番中心になっていく――逆な言い方をしてもいいけれども――あるいは、聖霊が浸透するといってもいい。もちろん浸透しなければダメだ、全部。浸透してくると、これは私たちが何か知らんけれども、もう心が――今まで宇宙的な心でなかったのが――正直、宇宙的な心が出てくる、もの凄く。

●栄西の「大いなるかな心」

「宇宙的な心」といったので、ちょっと私は思い出す言葉がある。それは栄西禅師（1141～1215）の有名な言葉です。

「大いなるかな心や。
天の高き極むべからず
而るに心は天の上に出づ。
地の厚さ測るべからず
而るに心は地の下に出づ。
日月の光は踰ゆべからず
而るに心は日月光明の表に出づ。
大千沙界は窮むべからず
而るに心は大千沙界の外に出づ。
それ太虚か、それ元気か。

「虚」という字は「空」とか「無」とかいう、捕捉できない何ものかをいうときに、この「虚」というような言い方をする。ただ「むなしい」という意味ではない。

「それ元気か」

という。「元気を出せ」というけれども、「元気」という言葉は素晴らしい言葉だ。宇宙の太元の気なんです、この「元気」というのは。宇宙の太元の気をいただかないで、元気なんていったって、そんなのは空元気という。たいていすぐ萎れてしまう。ところが、聖霊をいただくと、この聖霊は本当の元気なんだ。「元気を出せ」というのは、聖霊が来ていると、本当の元気が出るんです。だから、御霊の子らは何だか知らないけれども、力がある。それはこの元気なんだ。栄西の言葉は、私たちは御霊の光で読めば、もう楽に読めてしまう。

心は即ち太虚を包んで
元気を孕むものなり。
天地我を待って覆載し
日月我をまって運行し、

天地は自分がこれを被って載せている。日月が動くのはこの心でもって動いている。まぁとにかくでっかいやつですよ、この栄西というのは。

四時我を待って変化し

万物我を待って発生す。
大いなるかな心や。」

まるでこの心は神さまですよ。禅宗では、そういったもの凄い宇宙の大霊に即して、この「心」というようなことをこの栄西が言った。本当に突き抜けている。

だから、私たちの歴史的な精神界の第一流の人物をもっと今の青年は読み返さなくてはいかん。本当に今の教育界なんていうものは情けなくてしょうがない。先生方もひとつも大きなものを持っていない。忍耐力もなければ。もう全然ダメですよ、この日本は。だから、内村先生が、

「もうこんな国には愛想がつかしたと言ってくれ」

と言った。本当にその通りですよね。内村先生が今からもう44年も前に言っている。内村鑑三先生にしろ藤井武先生にしろ、非常に気宇の壮大な人でした。

この栄西の「心」は――「こころ」を「しん」と読めば、「神」に通ずるではないですか――この「心」は

「神心」

なんだ。栄西の言っている「心」は我々にいわせれば、神心、神の心なんです。

「契約をその心に録す、律法を心に録すのが契約である」

というときのエレミヤにおけるこの「心」というのは、本当に神の霊の浸透している心です。

「神の霊の浸透している心」

未だかつてそういったことを、恐らく言った人がないでしょう、ここのところを註解して。

神の霊が浸透している心に置くのだと。律法は全く霊的なものであって、いわゆる律法ではない。その全く霊的な律法はキリストが下さった。イスラエルの律法は隠れたる福音であった。その隠れた福音を露な福音にしたのが、露な律法にしたのがキリストで、そして逆に今度は、

「いわゆる律法は要らないよ」

という。

「律法から解放される」

とパウロが言ったところの事態です。そして、御霊に従うところが即ち霊法の世界、

「**生命の御霊の法**」

というローマ書8章2節です。生命の霊の御霊の法則に、御霊の法に従う。御霊を持つものは即ち自然に霊法が動いているわけです。だから、律法を成就してしまっている。律法の根本精神をキリストは成就した。表向きは律法を破ったよ、キリストは。安息日を破ったり何かしたから。ユダヤ人が、

「**なぜ、安息日を破るか!?**」

なんて言うと、

「神さまと一緒に私は今日も明日も働くんだ」

と、38年間病んでいた人を治した時にキリストは言われた。そういう、霊に浸透され、

「御霊に浸透された心にこの霊の律法を置く」

ということは、キリストの福音を――エレミヤ自身はそこまではっきり知らなかったかもしれないけれども――既に旧約を乗り越えた預言をしているわけです。そのことは実は、第三イザヤがさっき読んだところで言っていることと相表裏する。御霊の事態と、心のこの霊心の霊的な心の事態――「霊心」なんていう言葉があるか何かしらんけれども――そういうような契約がここに結ばれる。

●御霊の共同体

モーセが律法をシナイ山で授かった。ケルマンというユダヤ人が〔原始福音の集会で〕、

「モーセは律法を石の板に刻んで来たのだが、下の奴らがみんな信仰から外れているものだから、モーセが怒ってこれを叩き割ってしまった。律法は粉みじんになった。だから、律法はいわゆる書かれたものではない。霊的なものである。以後、律法は霊的なものなのだ」

なんていうことを言いましたが、「面白いことを言うなぁ」と私は聞いていた。即ち、律法は実は霊的なんだ。だから、本当に霊的なユダヤ人は、詩篇にも書いてあるように、

「我らは律法を喜ぶ」

と言っている。本当に嬉しかったとみえます。ところが、それが硬化現象を起こすんだ、宗教は少し経つと。そして今度は、律法を一生懸命で守っている。……

「神さまの造ったものは全て潔(きよ)からざるものなし。なぜ、食物の分け隔てをするか」

と。天から何か風呂敷が下りてきて、いろんなものがその中に入っていたでしょ、「これはみな結構なんだ」と。それでペテロはやっと目が覚めたというようなわけでしょ。イエスという方は何もこだわらないです、そういうことは。

断食する時は、なさったけれども、「断食せよ」とは仰りはしないですよ。止むに止まれずして断食する時はするだろうけれども。イエスは御馳走が好きでよく食べた。御馳走の話はよく出てくるもの、譬話でも。……

モーセが十誡の板を叩き割って、本当は律法は霊なるものであるという。しかし、

「この律法を本当にお前たちが守れば、お前たちはわが民であり、私はお前たちの神だ」

と。この、

「汝はわが民にして、我は汝の神なり」

という言葉は方々に出てくる。新約にも出てきます。私たちは主に対して、私たちは主の民です。我々の「主」はキリストであり、「汝らはわが民である」ということは、キリスト

との関係において、それは「エクレシア」です。

「教会」と訳すのは――話はいろいろ飛びますけれども――「教会」という訳はよくないです、正直。英語の「チャーチ」(church) とか、ドイツ語の「キルヘ」(Kirche) という字は、「キュリオス」(κυριος 主) というギリシア語からきているので、「キュリオー」といって、「キリストに、主に属するもの」という意味なんです。「主のもの」というのが本当の言葉です。「エクレシア」は即ち、「主に呼び出された者の群」ということでしょ。

ですから、マルチン・ルターはさすがにえらい。彼は「キルヘ」という言葉を使わないんです、いわゆる「教会」がダメなものだから。それで、「ゲマインデ」(Gemeinde 共同体) という言葉を使っている。「御霊の共同体」(Gemeinde des Geistes) という字をルッターは使っている。さすがにルッターだと思う。いわゆる「教会」は制度的なものではいかんということです。今のカトリックもプロテスタントもみんなそれでズレてしまっている。

「制度的なものはダメだ」

といって「無教会」といいだしたのが内村先生です。けれども、内村先生の無教会はよかったけれども――いわゆる組織ではなくて――これが学校みたくなってしまって、それでただ「聖書の研究」で、なにか本当の交わりが足りない。交わりの足りない個人主義的な、聖書のただ「研究」というような角度になってしまった。「信仰、信仰」というけれども、それが観念になってしまった。内村先生は弾力性のある方だからいいけれども、その亜流が、エピゴーネンが硬化現象を起こした。

そこで、手島さんや私が、「そうではない」といって反旗を翻したら、無教会から除け者に、アウトサイダーにされた。そしたら、私たちは使徒たちのインサイダーになったというのが、歴史的なわけですよね。

あなた方は、本当にその意味において、何も組織がなくて、御霊の交わりで結ばれている。これが本当のエクレシアなんです。あなた方は本当にキリストの御意にそっている群なんですから、それだけの自信を持ってください。また、使命感を持ってください。光栄を本当に感じてください。それで進んで行きます。これはもう是非ともじりじりと。御霊が宿っているかぎり絶対にほろびません。ご心配ないですから。

御霊が抜けたら、どんなに一生懸命に人間的に鍛えたってダメですよ。どんなに一生懸命に、いわゆる祈祷会をやってみたって、これはダメです。御霊のある限りは、どんなに外側に破れましても、これは必ず進んで行く。これは私ははっきりと確信を持っています。

●自由の律法・自由の霊

そういうわけで、このモーセが

「律法を守れば」

といった、その守り方が非常に硬化現象であったのが歴史的にイスラエルの歴史であった。

それでいわゆる律法主義になってしまった。預言者たちはそうではなかった。預言者たちはどこまでもエホバの霊によって動いていた。そして、それから生ずるところの宗教的道徳の現実、宗教的な実存、義と愛、この面を特に強調していました、どの預言者も。

「でなければ、滅びるぞ」

と。しかしながら、このヤーヴェーの霊という世界はまだどうしても、何といいますかね、本当の突き抜けができない。ユダヤ人としての枠が突き抜けられない。ユダヤ人が結局――あのユダヤ教で素晴らしい面を持っているけれども――なぜ突き抜けられないかというと、やっぱりキリストの霊でないからです。十字架を通っている霊でないからです。

十字架を通っている霊はもはや枠をつくらない。ところが、「十字架、十字架」といいながら霊を受けていないから、教会がまた枠になってしまう。無教会も枠になってしまった。

我々は枠なしですから、枠なしの群という(笑)。だから、あなた方は非常に気が楽なんです。枠なしの群は即ち、世界中を自分の兄弟とし姉妹とすることができる。誰に向かっても本当に福音を、存在をもって証していくことができる。これが枠なしの世界。これは御霊がきているからです。御霊の愛は最強であるから、何も恐いことはない。どう思われたって、一向差し支えない。それで行ってくださいよ。ええ、恐いものはないですから。

何としても、文化文明の根底にこの福音がなければダメです。教育の問題も勿論この宗教がなければ本当はダメなんです。だから、日本はもうひとつそこを文部省が、文部大臣あたりが、本当に豁然として目を開かない限りはダメです。今度、私はあの本〔著作集第1巻『無者キリスト』〕を書いたら、文部大臣なんかに送ってやろうと思っているんだ、本当に。

不思議だけれども、手島君が向こうに逝ってしまったら、やっぱり私はある使命を感じている。もうこれをやらないではしょうがないです、ある意味において。どういうやり方をするか知りません。彼らの群は彼らの群で充分行くから、それに参加してどうのこうのということは、私は思いません。ピンチヒッターにはいくらでもなりますけれども。

とにかく、私は私に委ねられた使命を是非とも果たさなければ、地上を去るわけにはいきません。皆さんもどうぞ、そういうことで行ってください。ここは本当の神学校、神さまの教育はやはり寺小屋式、霊的寺小屋として、あなた方が本当に若い人に是非とも

「この福音に来れ」

ということを時にははっきりと仰るがいい。何も遠慮することはない。どうせ我々は棄てられることは覚悟の上でやるんだから。棄てられることを覚悟の上で、

「あいつが断ったから、もうよそう」

なんて、そんな弱気をださないで、大いにやっていただきたいと思う。

とにかく、その契約は、

「律法はもうそのような律法ではないぞ」

というのがエレミヤなんだ。そして、エレミヤが約束した律法ならざる律法、自由の律法

――「自由の律法」という言葉が新約聖書にあるね――この自由の律法が即ち、御霊は即ち自由である。この自由の律法は――「自由の霊」という言葉がしきりに詩篇の51篇に出ているけれども――御霊の自由をもってするところの律法ならざる律法、これが霊法という。霊法の世界を私たちは最後の契約の内容としていただいているわけです。

●宇宙的なキリストの霊と一つになる

今度は新約聖書に来ます。ガラテヤ書3章15節、

「15**兄弟よ、われ人の事を藉りて言わん、人の契約すら既に定むれば、之を廃しまた加うる者なし。16かの約束はアブラハムと其の裔とに与え給いし者なり。多くの者を指すごとく『裔々に』とは云わず、一人を指すごとく『なんじの裔に』と云えり、これ即ちキリストなり。**

と、パウロははっきりと言っている。

17**然れば我いわん、神の預じめ定め給いし契約は、その後四百三十年を歴て起りし律法に廃せらるることなく、その約束も空しくせらるる事なし。**

この「約束」というのはアブラハムに対してのもの。

18**もし嗣業を受くること律法に由らば、もはや約束には由らず、然るに神は約束に由りて之をアブラハムに賜いたり。19然れば律法は何のためぞ。これ罪の為に加え給いしものにて、御使たちを経て中保の手によりて立てられ、約束を与えられたる裔の来らん時にまで及ぶなり。**20（中保は一方のみの者にあらず、然れど神は唯一に在せり）21**さらば律法は神の約束に悖るか、決して然らず。もし人を生かすべき律法を与えられたらんには、実に義とせらるるは律法に由りしならん。22されど聖書は凡ての者を罪の下に閉じ籠めたり。これ信ずる者のイエス・キリストに対する信仰に由れる約束を与えられん為なり。」**（ガラテヤ3・15～22）

この「信仰に由れる約束」、キリストを受けとるところの約束、

「キリストを受けとって初めてこの契約が本ものの契約である」

ということを言おうとしているわけです。

それから、コリント前書11章、

「23**わが汝らに伝えしことは主より授けられたるなり。即ち主イエス付され給う夜、パンを取り、24祝して之を擘き、而して言い給う『これは汝等のための我が体なり。我が記念として之を行え』25夕餐ののち酒杯をも前の如くして言いたもう『この酒杯は我が血によれる新しき契約なり。**

この「新しき契約」という言葉はエレミヤのさっきの31章31節に出ていた。それを受けている。エレミヤの預言はここで成就しているわけです。

飲むごとに我が記念として之をおこなえ』26 汝等このパンを食し、この酒杯（さかづき）を飲むごとに、主の死を示して其の来（きた）りたもう時にまで及ぶなり。」（コリント11・23～26）

即ち、この主の最後の晩餐からいわゆる聖餐――しかしながら、聖餐式として何も言われたわけではない、「聖餐式を行え」なんてことは言っておられないけれども――本当にいただく時にそのようにして「自分〔キリスト〕を覚えろ」ということ。「覚えろ」ということはただ「記憶しろ」ということではなくて、

「常に新しく自分〔キリスト〕を受けとれ」

ということです、内容としては。ですから、「新しき契約」というものはどこまでも、

「お前たちをこの永遠の生命の中に入れる」

といった霊的な生命の契約です。「ガイステス ブント」（Geistes Bund 霊的契約）なんです。あるいは「自由を与えるところの契約」（Freiheit gebendes Bund）と言います。「契約」という言葉は本来「縛る」という言葉だったけれども、実は「新しき縛り」というものはいわゆる縛りではない。本当の自由が、本当の生命がそこに与えられるところの内容です。

であるので、一体、契約の内容は何かというと、要するに、受けとって――契約そのものを実は私たちは問題にするのではない――契約におけるその内実は何かというと、主とそのエクレシアが、そのエクレシアの各個人、個体が今度は――さっき言った「縛る」という言い方はちょっとおかしな言い方ですが――これは「結び」なんです、一つに結ばれることです。一つに結ばれる実体は聖霊です。また霊的な心です。

「キリストの心を心とする」

という言葉がありますが、キリストの心をいただき、キリストの霊をいただくことが、即ちこの契約の内容なんです。そして、これが一つになる。

「主は即ち首（かしら）にして我々は体（からだ）である」

という、これも一つでしょ、エクレシアというものは。各人はまたキリストと信仰の事態において一つになる。即ち、この結び、契約を御霊にあって、御霊の信において受けとるときに、私たちは契約の実質の中に入る。契約をただ頭で考えたってダメです。その実質の中に入る。即ち、我々が「契約の民」であるということは、

「キリストと結ばれている民」

であるということです。これがいわゆる自然的な結びよりももっと強い、霊的結びですから。霊の結びの民である。

「宇宙的なキリストの霊と一つになる」

から、私たちの内容も無限無量なものをこの有限の中にいただいているわけです。我々のこの有限の中に、無限無量なものをいただくような、その新しき契約の内容はそれだけ雄大なものです。いいですね。

●最後の新天新地の神の民の一員にされる

だから、イスラエルの民を通して結ばれた旧約の契約を突き抜けて、全世界の民に、誰にでも来ているところの新しき契約の内容は、宇宙的なキリストと一つになるのですから、本当に天地融合的な事態です。

また、時間的にいうならば、この契約は非常に終末的な内容を持っているので、今現在、我々は――これは約束ですから――まだ神の国は来ていない。けれども、実は結ばれて、

「神の国は汝らの中にあり」

と、我々に来ています。既に終末の世界は我々にきている。今、この場は即ち「天国」である。と同時に今度は、「神の国」は最後にやってくる、この歴史が引っくり返って。歴史が引っくり返って「新天新地」がくる。それの時間的な終末の約束を持っている。その契約である。この契約は滅びない。必ず神の民として私たちはその時に神の国に入る。

その契約の実質を受けとらないで、契約をただ頭で受けとったってダメですよ。もちろん、信仰と同じで、観念ではダメなんだ。

「我々は契約の民であって、キリストに真に結び付けられているキリストのものである」

ということが、契約の実質を受けとっているわけです。そして、時間的にいうと、

「最後の新天新地の神の民の一員」

にされる。それでなかったら、私は息がつけないですよ、魂が窒息してしまう。

この浅間高原の空気はいいけれども、それ以上に魂の霊気を吸っているところの現実は、天国的な現実を今受けとっていると同時に、最後の新天新地の空気を何となく予感しているような事態、もう死んでも死なないところの事態、これがその契約の実体です。だから、契約というものは現在的なものであると同時に、終末的なものも契約の実質は持っている。即ち、我々がこの「契約の民」であるということは、

「キリストにおける新しき契約の民」

であるということ。ユダヤ人がそこの「新しき契約」を受けないのがユダヤ人の限界なんです。彼らはキリストを受けないんだから。キリストをメシヤとして受けなかったら、これはダメなんです。

もうひとつ、これは契約ではないけれども、ヨエル書によって、

「聖霊を万人に臨ませる、男にも女にも」

と、使徒行伝に引用されているヨエル書2章の終わりの方です。ヨエル書でもって、

「万人に聖霊が臨んでくる」

という。だから、その契約の一番の内実が臨んできたのがペンテコステなんです。新しき契約の保証はペンテコステにおいて始まった。我々はいつもあのペンテコステの聖霊降臨の事態を受けとっていく。さきほど申し上げたように、受けとっただけではダメだ、

「それが常燃の火として燃えていろ。即ち実質的に契約の民であれ」と。ということはこの御霊の事態を体現していなければ、契約の民であるとは言えない。そういうわけで、私たちは旧新約を貫いて「契約」ということがどのような内容を持っているかということをちょっと見たわけです。

●永遠の契約の血

コリント後書3章3節、

「3 **汝らは明かに我らの職（つとめ）によりて書かれたるキリストの書（ふみ）なり。而も墨にあらで活ける神の御霊（みたま）にて録（しる）され、石碑にあらで心の肉碑に録されたるなり。」**

（コリント後書３・３）

「心の肉碑に言が録される」という、さっきのエレミヤの言葉に相通じていて、内容的にそこのところがちょっと連関します。

それから、ヘブル書13章20節、

「20 **願わくは永遠（とこしえ）の契約の血によりて、**

これは永遠の贖罪の血ですよ。血によれる、

羊の大牧者となれる我らの主イエスを、死人の中より引上げ給いし平和の神、

あるいは平安の神、

21 **その悦びたもう所を、イエス・キリストに由りて我らの衷（うち）に行い、御意（みこころ）を行わしめん為に凡ての善き事につきて、汝らを全（まった）うし給わんことを。」（ヘブル13・20～21）**

ここに、

「**永遠（とこしえ）の契約の血**」

という、キリストの贖いの血によって、私たちは罪といわゆる律法から解放されて、そしてキリストの生命の中に入れられたことが契約の実質ですから、その血を血として、その肉を肉とする。霊血、霊肉ですから。即ち、御霊の生命です。

「十字架と聖霊は離すことができない」

と申し上げているのはそのわけです。「永遠の契約の血」というのはそういうことで、キリストの贖いによって私たちは結ばれたから、その実をいよいよ表していく。

「契約の民としの自覚を御霊において私たちはいよいよ持っていきましょう」

ということです。キリストの血というものは、このヘブル書において非常に深く、特にこれはヘブライ人に――いかに十字架のことに彼らが躓いているものだから――そのためにこのヘブル書は書かれているのですから。

それで、コリント後書1章22節、これはもう決定的な言葉です。

「20 **神の約束は多くありとも、然りと言うことは彼によりて成りたれば、**

キリストによりて成りたれば、

彼によりてアァメンあり、我ら神に栄光を帰するに至る。21**汝らと共に我らをキリストに（あって）堅(かた)くし、且われらに膏(あぶら)を注ぎ給いし者は神なり。**22**神はまた我らに印し、保証として御霊を我らの心に賜えり。」（コリント後書1・20～22）**

この20節から22節までが即ち、契約の内容を非常にまた別な角度からはっきり言っているわけです。

「契約の保証となっているものはこの御霊である」

と。要するに、御霊の民であるという実質を受けとっているときに、私たちは新しき契約の民として永遠に至る。そして、神の国を嗣(つ)ぐわけです。契約は、

「我は汝らの神、汝らはわが民なり」

という、あの繰り返しの言葉が旧約から新約に貫いているが、これがエクレシア的な内容であり、各個人が本当に

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

というのが、一番この契約の個人的な内容の実質であるわけです。これはもはや破ることができない。

「契約」という言葉は私たちにまだピンとこないような言葉ですけれども、「結び」と言った方がもっとはっきりするかも知れません。「結びの民」、結ばれたるものです。「宗教」という言葉が「再び結ぶ」という言葉です。だから、宗教という言葉は本当は「再び結ぶ」ということで、「新しき契約」という意味だな、言い換えると。「新しき結び返しの民」なんだ。だから、何といっても、福音だけがこの私たちにその自覚を非常に新しくしていく。

●罪からの自由・愛への自由

私たちの自覚はそうだけれども、それではキリスト教を知らない人たちはどうするのか。神さまはどういう者を民になさるか。

いわゆる契約の自覚のない人でも天界に行きます。これは誰も知らん。だから、私たちはこの契約ということを、結びということを何か狭い意味にとってはいかん。そこで結ばれると、結ばれた相手は何かというと、宇宙的なキリストですから。宇宙的なキリストをもって私たちが自覚するということは、万人に対して本当に開かれたる心、万人に対しては結びの解かれた心です、非常に逆説的な言い方をするけれども。本当に結ばれたる民は、

「俺たちは結ばれたが、あっちはどうか知らない」

なんて、そんな無責任なものではない。それは宗派的な根性だ。ところが、結びの内容が素晴らしい相手ですから、私たちはいわゆる結びを解くところの、「結ばれている」ということ――これは本当にそうなんです――「キリストの僕(しもべ)」ということ。

キリストの主の御意を「はい、はい」と言って行じていくのが僕である。そして、この僕は何をするかというと、「万人に仕える」という。マルチン・ルターの「クリスチャンの自由」です。僕はすべての「人に仕える」というのは、「奉仕する」ということ、もっとはっきりいうと、すべての「人を荷う」ということなんです、仕えることは。縁の下の力持ちになるということは、ここにキリストの主の意と御霊の力がくるから。

「御霊のあるところには自由あり」

でしょ。これは愛への自由なんです。自分の罪から自由になった人は、今度は積極的に愛への自由となる。愛への自由ということは、これは荷いの姿。敵をも荷なってしまう、担ぎあげてしまう。どんな人をもみんなこれを救いの方へ持っていくという、非常に雄大なんだ。この僕であるから、本当に自主性が出る。自主性というものは、「自主」とか「自由」というものは、これは「僕」でなければ出てこない、本当の意味で。キリストを「主」としなければ、本当の自主になれない。本当の自由もこない。即ち、キリストに絶対的に縛られるということは、本当の自主で自由で、自在に動く。だから、結ばれていることは逆説的にいうと、いかなる束縛も持たない。そして人を救う。

「クリスチャンはすべての者に対して自由である」

ということと、

「クリスチャンはすべての僕である」

ということは全く一つのことを別の面から言っているだけのはなしで、ちっとも矛盾していない。即ち、契約の民は、ちょうど「クリスチャンの自由」のこれを持ってくれば一番はっきりする。それで一切を包んでいく。……

●人間の実存的七相

これは、私の神学でも何でもないですが、私のとっておきのことをあなた方に申し上げる。人間は――まぁ「人間」なんて言わなくたって、私自身でいい――私は「破れ」の人間です。これは破れ果てたるもの、八方破れ。ひとつも立派でない、ダメな野郎だ。

この破れの人間は、もっと徹底的に破れを自覚するためには「砕け」に来なくてはいかん。砕けも自分で砕けたって、砕け切りっこないから、これは十字架というわけです。イエス・キリストの十字架の砕けにぶつかって、私は本当に砕けをいただいた。自分が砕けたのではない。キリストの砕けを賜る。もうこれ以上、砕けを木っ端微塵にできない。私をもっと砕いてごらん、これ以上砕けないんだ。どん底に砕けてしまったから。キリストの十字架をいただいているんだから。「私は魂が砕けました」なんて、そんな体裁を言っているのではない。私はイエス・キリストの砕けをいただいて――砕けといっても、「平伏し」といってもいい――平伏しそのものです。

それから、砕けると、今度は、キリストは墓を突破しました。墓を突破して復活しました。

そして今度は、上から聖霊として臨んできました。「突破・突入」です。突入はキリストの霊が突入してくるんです。自分が突破されて――自分で突破するのではない――私は突破されて、御霊のキリストが突入していらっしゃった。

御霊のキリストが突入して、聖霊が燃え立った。それで消したらダメだよ。それがさっき申し上げた、「常燃」のところなんです。その常燃というところにくる。御霊の常燃の世界です。常燃の魂。常燃の魂にくると、今度は力がくるんですからね、常燃の世界は。

そうすると今度は人を包んでしまう。審かない。荷なってしまう。「包み・荷い」の事態、これが愛ですよ。もう「赦し」なんていうこともみんな入ってしまう、この包み荷いという表現の中に。それで、包み荷なってしまうでしょ。

そうすると今度は――包み荷うといったって、人間は相対的なものだから――終いにはぶっ倒れます。それが棄身です。「棄石・棄身」。地上では棄石棄身でよろしい。それは十字架を負っていることなんです。ここへ御霊が来て愛がくると、これが要するに最後の姿は棄身です。殉教的なものです、その精神は。これが棄身の愛です。

「人に棄てられたる石は隅（すみ）の首石（おやいし）となれり」

という。これは「ヘッドストーン」といいまして、上の方にある大事な隅の石。「隅の首石」と日本語でいうと、何か下の土台石という――そう考えたっていいですよ――私はむしろ、土台石であると同時にまた頂点の石であると、両方考えたいけれども。そういった隅の首石、

「棄てられたる石は隅の首石となれり」

という詩篇8篇の、キリストが引用された、またペテロも引用した言葉。この棄て石、隅の首石となる。そうして最後は、天界の宝石、「宝玉」となる。天界の宝玉となる、最後の世界は、新天新地の宝玉となる。

破れ、砕け、突破突入、常燃、包み、棄石、宝玉となる。これがクリスチャンの本当の姿だと思う。七つの相です。イエス・キリスト自身がこれでありたもう。

キリストは神さまの前に「破れ」ていました。

「なぜ、私を善いと言うか」

と、彼は自分を何ものともしなかった。本当に平伏して「砕け」ていきました。キリストの中にはもの凄い聖霊が「突入」して来ます、あのヨルダンで。彼には常に御霊が「常燃」して、あの驚くべき言葉と実存を発している。全体を「包み」荷なってしまう。彼は「棄て」られた、十字架に。そして、もう天界の「宝玉」どころの騒ぎではない。

このキリストの実存は、即ちキリストに結びつくと、契約の民となると、これだけの実存が出てくるんです。私はもう言うことなし。

そういうのが我々のこの実存構造ですよ。過去・現在・未来を、地獄・煉獄・天国を全部掌握しているような驚くべきところです。

これがクリスチャンの実存の七相なんです〔註：詳細は『無者キリスト』／第二部「人間の福

音的実存七相」を参照のこと）。「七」というのは完全数を表す。もういつ死んでもいいんだ、僕は。それでは、祈りましょう。

●祈り

主さま、あなたの驚くべき旧約・新約の二つの旧き契約・新しき契約、この全聖書を貫いているところの事態に導かれまして、私たちのこの小さな体に盛りきれないようなあなたの驚くべきご恩寵の事態に圧倒されて、ただ聖名を讃え奉ります。

主さま、どうぞ、このような驚くべき福音をいかにもして、これから何年かかっても死に至るまで、地上の生涯の終わりに至るまで、いよいよあなたが自由自在に一人びとりを通して証し、またこの内容をいよいよ無限に展開してくださるように願い奉ります。

斯(か)くして、本当に私たちは賜りたる存在です。どうぞ、この賜りたる存在が天上において本当に星となって、宝石となって、活ける石となって、天国を築くことができますように。この驚くべき大希望をもってこの地上の生涯を突っ走って参ります。川口〔愛子〕さんはまたそのことをやって天界に行きました。この川口姉妹のゆえに聖名を讃え奉ります。

〔註：「１９７２年の暮、ついに彼女は天に帰った。二十年を超える彼女との交友は、専ら伝道集会を中心とするものであった。……１９７２年12月27日！ついに彼女の霊魂はみ使いの翼に乗って主のみ許に昇っていった。余りにも深い悲しみ！」（著作集第６巻『随想集』より）〕

またその他の兄弟姉妹たちも同じくそのようにして参りましたが、どうぞ、彼らを天界において讃美より讃美へと向かわしめたまわんことを願い奉ります。

ここにあるところの兄弟姉妹たちは、この福音を受けたら、何か知らんが全存在に力が入ってきた。あなたの御霊の契約は決して単なる観念的な約束ではなくして、本当にあなたの実質的な結びであり、そして、この結びによって結ばれたる者は限りなく人々をこの自由なる結びの中にいよいよ取り入れていくことの使命を感じて感謝であります。いかなることに対しても、人をどん底から愛することができ、また人をどん底から助けることができるのは、この事態であることを受けとって、聖名を讃え奉ります。もはや、わが何ものでもありません。

主さま、あなたが斯くしたもうから感謝であります。どうぞ、兄弟姉妹たちの一人びとりを通して、のっぴきならない光を放ち、のっぴきならない力を表し、のっぴきならない愛を表してくださるように、切に願い奉ります。斯くして本当にこの石垣会の人たちと共に、このようにして稀に与えられたところのこの集会、本当に聖名を讃え奉ります。僕(しもべ)はただ平伏すばかりであります。神さま、どうぞ、また時あってか、いつでも自在に在らしめてくださって、互いに歓びを共にし、希望を共にして進んで行くことができますように、お憐れみくださらんことを切に願い奉ります。心からの感謝と讃美、言い尽くしません。兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により捧げ奉る。アーメン。